

空間的距離の認知が社会的距離に及ぼす影響¹⁾

—外集団間の差異に焦点を当てて—

武藤麻美*・釘原直樹*

Effects of Spatial Distance Perception on Social Distance, Focusing on Out-group Differences

Mami MUTO* and Naoki KUGIHARA*

Effects of spatial alienation from in- and out-group targets on participants' perceived social distances to the groups were investigated, by using a 3 (targets of evaluation: in-group member vs. negative out-group member vs. positive out-group member)×2 (experimental manipulation: spatial distance condition vs. control condition), between-participants, factorial experimental design. Results indicated the following: (1) Manipulation of spatial distance did not influence social distance for in-group targets; (2) Spatial distance did not affect social distance for negative out-group targets with a more negative image than positive out-group targets; and (3) Perception of long spatial distances increased social distance of positive out-group targets. These findings indicated that existing impressions regarding groups, and their strengths, influenced the impact of stimulus information. Especially, the evaluation of groups fluctuated easily when the existing impression was positive, with little strength. These findings are expected to contribute to understanding the feelings of between group members.

key words: spatial distance, social distance, in-group, out-group, the existing impression about groups

問 題

空間的距離と社会的距離の概念

空間的距離 (spatial distance) とは、対象との地理的距離や物理的距離といった、空間における近接・遠隔の度合いをいう (e.g., Liberman, Trope, & Stephan, 2007)。また、社会的距離 (social distance) とは、相手との親疎を意味し、社会的距離が近いと親密度 (closeness) が増すが²⁾、社会的距離が遠いと親密度が減少し、ポライトネスが増すとされる (Liviatan, Trope, & Liberman, 2008; Stephan, Liberman, & Trope, 2011)。また、社会的距離の近い相手は、類似性も高く認知され、好意度も高く評価される (Liviatan et al., 2008)。先行研究では社会的距離を問う項目とし

て、相手と友人関係を持つことの困難さや、一緒に働くことへの不安や当惑、近隣に居住することへの反対、自分や親族が相手と結婚することへの反対、などが用いられている (e.g., Gaebel, Baumann, Witte, & Zaeske, 2002)。

あるカテゴリーに属する人々に対し、空間的距離が遠く、社会的距離の認知も同じく遠いという問題が、現実の社会問題では散見される。例えば、異教徒や異人種への差別や偏見を扱った先行研究で、住民達の、異教徒や異人種に対する空間的距離と社会的距離の遠さが示唆されている。Brockett, Village, & Francis (2009) は、英国の中・高校生を対象に、イスラム教徒への社会的距離 (近隣居住の是非や結婚への容認度など) を問うている。その結果、イスラム

¹⁾ 本論文を執筆するにあたり、神戸山手大学の村上幸史先生には、貴重なご意見を頂きました。心より感謝申し上げます。また、実験実施にあたり、神戸女子大学の小原依子先生にご協力頂きました。深く感謝申し上げます。

* 大阪大学大学院人間科学研究科

Graduate School of Human Sciences, Osaka University, 1-2 Yamadaoka, Suita, Osaka 565-0871, Japan

教徒が近隣に居住している場合よりも、同じ市に居住している場合の方が、英国民のイスラム教徒への社会的距離評定値が大きかった。つまり、空間的距離の遠さと、イスラム教徒に対する社会的距離の遠さの関連がうかがえる。

空間的距離の遠近の認知が、社会的距離の遠近の認知に関連する理由として、解釈レベル理論 (construal-level theory) による説明が挙げられる (e.g., Liberman et al., 2007)。この理論によると、心理的距離の概念 (次元) として、時間的距離・空間的距離・社会的距離などが考えられるが、いずれの心理的距離も、自己を起点とした主観的な距離であり、相互に関連し、影響を及ぼし合い (自動的に互いを活性化し合い)、互いの心理的距離の知覚を促すとされる (e.g., Stephan et al., 2010)。Stephan et al. (2010) によれば、空間的距離が遠い対象とは関わりが少ないため、経験や視点を共有しにくく、ポライトな言動が増え (くだけた言動が減少し)、親近感も低下する (社会的距離も遠くなる) とされる。言い換えれば、対象との空間的距離が近くなるほど、直接的経験 (対象への直接的関与) が増加し、対象に関する情報が利用しやすくなり、解釈も具体化する (Fuji-ta, Henderson, Eng, Trope, & Liberman, 2006)。そして、対象を理解しやすくなるため、親近感も増す (社会的距離も近くなる) といえる。

また、二次元の座標を用い、より単純化した実験方法で、空間的距離と他者への評価 (社会的距離) との関連を検証した研究として Williams & Bargh (2008) のものがある。そこでは、空間的距離を遠ざけたというプライミングが、その後の、空間的距離とは無関連な刺激対象への評価に影響を及ぼすことが示されている。彼らは、物理的近接性や距離の空間的表象は、人の主観的経験に影響するとし、自己を起点としない距離であっても、空間的に距離を取ったという感覚が判断や感情に影響するとしている。

彼らは、デカルト座標 (直交座標) を用い、参加者にあらかじめ座標上に2点を記入させ (空間的距離のプライミング)、その後、参加者の家族と故郷への愛着の強さ (繋がり) の強さを聞いた。すると、空間的距離が遠いとプライミングされた参加者は、空間的距離が近いとプライミングされた参加者よりも、愛着の得点が低かった。これより、空間的

距離が遠くなると、重要他者への愛着感情が弱くなる可能性があるとしている。

この実験による座標上の距離は、自己を起点としない空間的距離であったが、重要他者への愛着の強さに影響を及ぼした。なお、愛着の肯定的側面として親密さが考えられる (e.g., 久保, 2000) ことから、上記の結果を基に考えると、二次元上の空間的距離の遠近の刺激が、親密さの程度を表す社会的距離の遠近の認知にも影響することが考えられる。

しかし、例えば日本にとって「近くて遠い国」と言われる中国や韓国のように、空間的距離と社会的距離が、正の相関関係とならないケースもあると考えられる。外交に関する世論調査 (内閣府大臣官房政府広報室, 2014) によると、中国に対し親しみを感ずると回答した人は14.8%、韓国に対し親しみを感ずると回答した人は31.5%であったが、米国に対し親しみを感ずると回答した人は82.6%にものぼった。米国に比べて、中国や韓国は日本との空間的距離が近いが、社会的距離は遠いことが示唆されている。一方の米国は、空間的距離は遠いが、社会的距離は近いといえよう。これより、空間的距離と社会的距離は必ずしも正の相関を示すわけではなく、同一のものではない、弁別可能な概念であるといえる。

内・外集団成員に対する空間的距離と社会的距離

さらに、英国民を対象にした研究で、同じ白人よりも (内集団成員)、アジア人や黒人 (外集団成員) が近隣に越してくる場合にネガティブ評価が高く、特にアジア人が越してくる場合に最も評価が悪かったという報告もある (Brockett, Village, & Francis, 2010)。これより、条件として類似の空間的距離を与えられても、外集団間では社会的距離の遠近に違いが見られ、社会的距離が遠くなる集団と、近くなる集団があることが考えられる。すなわち、評定対象によっては、空間的距離の遠近を認知すること、言い換えれば物理的かつ心理的の刺激 (物理的の刺激の知覚) を受けることが、社会的距離に影響する程度 (または影響のしやすさ) には違いがあると考えられる。

また、類似の物理的・心理的の刺激を与えられても、対象集団に関する心理的反応が異なってくる例として、向田・坂元・村田・高木 (2001) の研究が挙げられる。彼女らは、オリンピック直前と直後

で、諸外国に対する好意度の変化を検討しているが、そこでは米国や欧州諸国への印象が、イベント（オリンピック）を挟むことで変化しやすく、好意度が上昇することが示されている。一方、中国や韓国に対する印象の変化は見られず、好意度は相対的に低いままであった。これらの結果より、空間的距離をはじめ類似の物理的・心理的刺激を与えられても、ある外集団では印象が容易に変動するが、別の外集団では変動しにくいことが考えられる。

だが、先行研究では、類似の空間的距離や物理的・心理的刺激を与えられても、何故対象集団間で社会的距離評定値に違いが出るのか検証されていない。例えば、向田ら（2001）は、中国や韓国は、日本との歴史的な背景もあって、短期間の報道では印象が変化しにくく、好意度が低いままだったのではないかと推察している。だが、中国や韓国と同様、歴史問題のある外国、例えば過去に対戦の歴史があり、今なお北方領土問題が存在するロシアについては、好意度が上昇しており、中国や韓国の結果とは反する。そのため、中国や韓国に対する印象が変化しにくかったことについて、歴史関係の説明だけでは十分に解釈できないといえる。何故、一定の刺激によって、社会的距離が変動しやすい外集団があり、そのまた逆があるのか、共通する心理的法則を見出すことが必要である。

この心理的法則を明らかにすることは、国家間の国民感情を理解することにも繋がる。現状として、日本における中国からの留学生や、観光客、労働者数は米国や韓国よりも多く（e.g., 総務省統計局, 2014）、群を抜いており、国民同士が関わる機会が多い。そのため、国籍に基づいた心理的葛藤が何故起こるのかについて、中国を採り上げ（外国を一括りにしてアプローチするのではなく、具体的な国を採り上げて）、その心理的要因を明らかにすることは、グローバル化が進む今後の日本社会にとっても意義があると考えられる。

これまで政治・経済的には、近隣国ほど国境にまつわる問題や、移民流入、安全保障上の問題などの利害によって、対立しやすいことが示唆されているが（e.g., 防衛省・自衛隊, 2014）、心理的な要因は解明されていない。しかし、先述のように、国籍に基づいた心理的葛藤は、外集団成員を対象にして多く生起している（e.g., Brockett et al., 2010）。そして、

一口に外集団といっても、既存の印象がポジティブなもの、ネガティブなものがあるため、個々の外集団に着目し、どのような外集団かを考慮に入れて検討する必要があるだろう。そこで本研究は、空間的距離と社会的距離の関連に関する先行研究を基に、空間的距離を物理的・心理的刺激と見なして用い、内・外集団に対する社会的距離に与える効果を検討した。そのなかで、刺激の効果のインパクトが波及しやすい（または波及しにくい）集団を確認し、外集団間で、印象の変動のしやすさを分ける要因を検討する。

空間的距離と社会的距離の関連に影響する、集団に対する既存の感情

先行研究より、空間的距離が遠いと、社会的距離も遠くなると予測される。ただ、空間的距離の遠近の認知が及ぼす社会的距離への効果は、既存の印象の強度（好意度の強さ）が小さい集団で顕著になると考えられる。言い換えれば、内集団成員については、ポジティブ感情（好意度）の強度が大きいため、空間的距離が遠いという刺激情報が与えられても、社会的距離は遠くならないと考えられる。

例えば、内集団ひいきのように（Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971）、最小条件パラダイムにおいて、相互作用がないにもかかわらず、単に内集団・外集団というカテゴリ分けをされただけでも、人は外集団成員よりも内集団成員を高く評価する。これは、所属する内集団が、社会的アイデンティティの拠りどころとなることが多く（Tajfel, 1982）、肯定的な社会的アイデンティティを有することが、自尊心の維持・高揚にも繋がるため（Karasawa, 1991）、起こると解釈される。つまり、内集団は外集団よりも既存の印象がポジティブであり、なおかつその強度も大きいことが予測される。そして、既存の印象の強度が大きい内集団は、空間的距離が遠いという刺激情報が与えられても、内集団への評価は容易には変化しないと考えられるため、社会的距離も変化しないと予測できる。

また、外集団間では、元来ネガティブな印象を抱いている外集団で、空間的距離が遠いという刺激情報の影響が小さくなると考えられる。これは、刺激によって印象が変化する傾向は、元々ネガティブなイメージを持つ対象については出現しにくい（向田ら, 2001）とされることから推測される。例えば、

いったん形成されたネガティブな対人態度は、否定情報によって訂正されにくい可能性が指摘されている(唐沢・川口, 2003)。唐沢・川口(2003)は、ターゲットに関する誤情報が否定されても、ネガティブなエピソードは、ネガティブでないエピソードよりも再生率が高くなることを示した。ターゲットに関するネガティブな情報は、時間を置いてもより多く保持されており、ネガティブ情報の効果の薄れにくさが示唆されている。つまり、既存の印象がネガティブな外集団については、空間的距離が遠いという刺激情報を与えられても、社会的距離は変動しにくいと考えられる。

本研究の仮説と実験概要

以上の議論より、次の仮説を導き出した。先行研究より、ターゲットとの空間的距離が遠い位置であると認知したほうが、近い位置にあると認知した場合よりも、社会的距離が遠くなると考えられる。しかし、内集団成員は、内集団に関する既存の印象(ポジティブ感情)の強度が大きいため、空間的距離が遠いという刺激情報を受けても、内集団への評価は変動しにくく、社会的距離は遠くならないだろう(仮説1)。なお、外集団は内集団よりも、既存の印象の強度が小さいと考えられる。ただし、既存の印象の強度が同程度の外集団間では、既存の印象がネガティブな外集団で、空間的距離が遠いという刺激情報を受けても、当該外集団への評価は変動しにくく、社会的距離は遠くならないと考えられる(仮説2)。

本研究では、ターゲットが書いたとするエッセイ(認知者の価値観や内集団規範とは不一致の内容)を提示後、ターゲットへの空間的距離を線分上(天貝, 1996)に点で記入させる。そして、ターゲットへの社会的距離について回答を求めるが、ここで、空間的距離の実験操作を挟む。この操作は、ターゲットとの空間的距離が遠いという認知を強調させるための物理的・心理的刺激で、ターゲットに対する第三者の空間的距離評定値を提示する。第三者の空間的距離評定値を用いるのは、他者との比較により、自分の空間的距離の認知を、より活性化させるためである。この第三者の空間的距離評定値には、参加者の印した距離から遠い群(参加者の評定値との間隔が長い)と近い群(参加者の評定値との間隔が短い)を設け、前者では参加者に、“他の人と比

べても、自分とターゲットの空間的距離は遠かった”という認知を強調させることを狙いとする(空間的距離が遠いことを意識させる群: 遠距離確認条件)。また、後者はその比較群とし、“自分の取った空間的距離は、他の人と比べても、だいたい同じようなものだった”と認知させることを狙いとする(空間的距離が遠いと意識させない群: 統制条件)。そして、これらの操作を挟むことで、その後の内・外集団ターゲットへの社会的距離評定値に違いが見られるか検討する。二次元上の空間的距離を用いるのは、より単純な方法で実験操作を行うためである。

なお、本研究では、参加者が明確なイメージを持つと考えられるテーマ(原発問題)や、明確なイメージがある内・外集団(日本・米国・中国)を対象とした。テーマの明確さは、ターゲットへの反応方法や動機づけに影響するとされる(Frings, Abrams, Randsley de Moura, & Marques, 2010)。本研究も、参加者がある程度、テーマの賛否について確立した価値観を有し、ターゲットの意見に対しても判断を下しやすいと思われる、深刻度の高い時事問題をテーマとすることにした。

方 法

内・外集団選定の理由

テーマを当時の日本における重要な社会問題とすることから、内集団成員に日本人を選定した。外集団成員として米国人と中国人を選んだのは、メディアを通じた認知度も高いためイメージしやすく、投影法を用いた空間的距離の測定にも回答しやすいと思われたからである。そして両国は、共に日本と関係の深い外国ではあるが、既存の印象は異なると考えられる(内閣府大臣官房政府広報室, 2014)。外集団間でも比較するため、既存の印象が同一でないと考えられる両国を、外集団として採り上げた。

内・外集団に関する予備調査

選定した外集団(米国・中国)が内集団(日本)と比べて、既存の印象に差があるか、また外集団間でも印象やその強度に差があるか確認するため、女子大学生169名を対象に予備調査を実施した(年齢: $M=18.38$, $SD=1.17$)。各国民について、好意度とその強度(好ましさについて、どれくらい強くそう思ったか)を8件法で問うた。ダミー項目とし

て、日本とはなじみの薄いスイスも含めた。

その結果、国籍の主効果(好意度: $F(3, 327) = 65.52, p < .01, \eta^2 = .38$; 強度: $F(3, 324) = 5.13, p < .01, \eta^2 = .05$)が見出された。日本は米国・中国よりも有意に好意度が高く、米国はスイスよりもやや低い傾向にあった(日本: $M = 5.72, SD = 1.51$; 米国: $M = 4.71, SD = 1.34$; 中国: $M = 2.89, SD = 1.50$; スイス: $M = 5.28, SD = 1.21$)。また、米国・スイスは中国よりも有意に好意度が高く、中国が最も好意度が低かった。強度については、日本は米国・中国・スイスよりも有意に強度が高かったが、外集団間で差は見られなかった(日本: $M = 5.43, SD = 1.43$; 米国: $M = 4.81, SD = 1.30$; 中国: $M = 4.52, SD = 2.04$; スイス: $M = 4.82, SD = 1.48$)。

日本人に対しては、好意度も高いが強度も大きく、ポジティブな印象が強いことが示された。米国人に対しては、好意度・強度ともに日本人よりも低かったが、他の外集団成員(中国人)に比べて好意度が高く、ポジティブな印象であった。一方、中国人に対しては、最も好意度が低く、ネガティブな印象であった。これより、内・外集団における既存の好意度と、その強度の違いが確認できたため、本実験を実施した²⁾。

実験参加者

関西の4年制私立大学の女子学生(教育学専攻・家政学専攻)95名を対象とした。平均年齢は19.39歳($SD = 1.88$)であった。海外からの留学生はいな

²⁾ 好意度とその強度の、二変数間には中程度の有意な相関が見られた($r = .43, p < .01$)。

好意度とその強度の二変数に対し、主成分分析も実施したところ、第一主成分の寄与率は71.47%であり(固有値は1.43)、全体の約2/3を説明していた。主成分負荷量は、好意度が.85、好意度の強度も.85であった。これより、第一主成分を、好意度とその強度の合成変数「既存の印象得点」とし、当該変数を従属変数、国籍を独立変数とした分散分析を実施した。

その結果、国籍の主効果($F(3, 323) = 30.07, p < .01, \eta^2 = .22$)が見出された。日本はスイス・米国・中国よりも既存の印象得点が高かった。スイスと米国の間では、有意差は見られなかったが、スイス・米国は中国よりも、既存の印象得点が高かった(日本: $M = .53, SD = .96$; スイス: $M = .16, SD = .87$; 米国: $M = -.04, SD = .83$; 中国: $M = -.75, SD = .87$)。日本が最もポジティブな印象を受け、中国が最もネガティブな印象を受けていることが示された。

かった。

実験デザイン

ターゲット人物の国籍(日本人・米国人・中国人)×空間的距離の操作(遠距離確認条件・統制条件)の2要因参加者間計画とした³⁾。

実施時期

2011年7月下旬から8月中旬に実施した。

手続き

実験に先行して、集団同一視尺度や、原発問題への意見などを含んだ事前質問紙を講義時間中に配布し、集合形式で調査を実施した。実施にあたっては、“原発問題に関する意識調査である”と説明し、調査後に実施予定の実験協力も依頼した。続いて約1週間後、参加者には個別に実験室まで来てもらい、仕切られたブース内でエッセイ(原発保有に対する賛成意見)を読ませ、エッセイの著者である、ターゲットに関する社会的距離評定項目を含む事後質問紙に回答してもらった。エッセイはランダムに配布した。

空間的距離の実験操作

参加者が空間的距離評定値を回答後、実験者が第三者の空間的距離評定値を提示するという操作を挟んだ。この操作は2条件あり、遠距離確認条件では、他大学で多くの学生が印した空間的距離の値であると言って、参加者の印した空間的距離評定値よりも、4.0 cm 短いところに印をつけた線分を提示した(統制条件では0.5 cm 短いものを提示した)。

遠距離確認条件を4.0 cmに設定したのは、本実験とは別に実施した、女子大学生17名対象の質問紙調査の結果に基づく(年齢: $M = 19.29, SD = .69$)。そこでは、9.5 cmの線分上に、点Aと点Bの2点を印したものを示し、この2点間の空間的距離が離れていると感じるかを問い、“感じる”“感じない”のいずれかを選ばせた。その結果、2点間の空間的距離が3.0 cmから3.5 cmにかけて、“感じる”“感じない”の割合が半々となり、4.0 cmの場合に“感じる”が64.7%と、空間的距離が離れていると感じる割合が明確に多くなることがわかった。そこで、

³⁾ 実験参加者の内訳は、日本人・遠距離確認条件が15名、日本人・統制条件が19名、米国人・遠距離確認条件が15名、米国人・統制条件が17名、中国人・遠距離確認条件が15名、中国人・統制条件が14名であった。

空間的距離の操作によって、第三者の空間的距離評定値の平均値が、自身のそれとは離れていると参加者に認識させるために、4.0 cm を遠距離確認条件に設定した。また、統制条件については、第三者の空間的距離評定値の平均値が、参加者の印した空間的距離評定値とあまり変わらない位置であることを印象付けるため、2点間の空間的距離が離れていると感じた人のいなかった0.5 cm に設定した。

そして、第三者の空間的距離評定値の提示後、ターゲットへの社会的距離を測定する項目や、操作チェック項目に回答してもらった。最後にデブリーフィングを行い実験終了とした。

実験実施約1週間前に配布した質問紙(事前用質問紙)

1. **外集団成員との接触頻度** 米国人・中国人との個人的な接触頻度を問うた(3件法)。

2. **参加者の原発への態度** 参加者の原発賛成の程度を問うた(7件法)。

3. **原発問題の重要性** 参加者にとっての話題の重要性を問うた(7件法)。

4. **内集団への集団同一視** 内集団への同一視の程度を測定するため、集団同一視尺度(唐沢, 1991) 12項目を用いた($\alpha=.72$) (7件法)。

5. **各集団成員への既存の印象** 日本人・米国人・中国人の各集団成員について、総合的に評価して好ましい(好意度)に関し、8件法で回答を求めた。

6. **各集団成員への既存の空間的距離感** 日本人・米国人・中国人に対する既存の空間的距離感についても問うた。測定具は、後述の事後用質問紙で空間的距離の測定に用いた、天貝(1996)の線分を使用した。

実験時に使用したエッセイと質問紙(事後用質問紙)

1. **エッセイ** ある日本人の女子大学生(もしくは、ある米国人留学生の女子大学生、または、ある中国人留学生の女子大学生)が書いたとする、原発の保有についての意見が述べられたエッセイを読ませた。米国人・中国人条件では文章をそれぞれ英訳ないし中国語に訳したものをを用いた。いずれの条件も、手書きのエッセイをコピーしたものをを用い、英文・中国語文の場合は下部に和訳を添えた。

2. **ターゲット人物の原発賛成度** 操作チェック

項目として、ターゲットの原発保有への賛成度を問うた(7件法)。

3. **ターゲット人物に関する空間的距離評定値** 9.5 cm の線分(天貝, 1996)を測定に用いた。左端に自身がいるとし、ターゲットが、自分の気持ちからどれくらい距離にいるかを問う、1本の線分上に印を付けさせた。この天貝(1996)の線分は、例えば、美山(2003)によって妥当性や信頼性が確認されている。測定は実測値(mm)を用いた。Williams & Bargh(2008)では、座標上の2点間の空間的距離を用いているが、自他間の空間的距離を扱えていない。本研究では彼らの研究を参考にしつつも、二次元上に自他間の空間的距離を顕在化させるため、左端の自己を起点として、相手の位置を同次元上に表すことが可能なこの線分を用いた⁴⁾。

4. **ターゲット人物に関する社会的距離評定値** 社会的距離の測定項目を用いた先行研究(Gaebel et al., 2002)を参考に、ターゲットについて、一緒にいたくない・理解できない・日本に住んでもらいたくない、の3項目について9件法で回答を求め、平均値を社会的距離得点とした($\alpha=.82$)。

5. **空間的距離の操作の有効性** 空間的距離の操作の効果があつたか確認するため、第三者の空間的距離評定値を提示された時、自分が相手をかなり遠ざけていると感じたか、実験後に問うた。これについて“感じた・感じなかった”を選択させた。

結 果

分析対象者

1. **外集団成員との接触頻度** 実験で中国人ターゲットを評定した参加者のうち、事前調査で中国人との個人的な接触が“かなりある”と回答した2名分のデータを除いた。

2. **参加者の原発への態度** 参加者の原発賛成度は($M=3.68, SD=1.18$), 中点よりも有意に低く($t(92)=2.63, p<.05$), 参加者は日本が今後も原発を保有することに対し、どちらかと言えば反対する傾向にあった。なお、原発賛成度がターゲットのもの

⁴⁾ 天貝(1996)の線分は、本来親密さの程度を測定するために開発されたものだが、2点間の空間的距離をつくり出すという点で、むしろ本研究における二次元の空間的距離の測定に用いた方が妥当と考えた。

($M=5.72$, $SD=1.49$) よりも高かった 6 名は分析から除外した⁵⁾。87 名を分析対象とした。

また、参加者にとっての原発問題の重要度は ($M=5.29$, $SD=1.19$)、中点よりも有意に高かった ($t(86)=10.09$, $p<.01$)。参加者は、原発問題を、ある程度重要度の高い問題として認知しており、テーマへのコミットメントは高いといえる。

3. 参加者の集団同一視の程度 参加者の集団同一視は ($M=5.08$, $SD=.65$)、中点よりも有意に高かった ($t(86)=15.50$, $p<.01$)。参加者は日本人として、ある程度高い集団同一視を有していた。

条件間で、参加者の集団同一視に差が見られるか確認するため、ターゲットの国籍（日本人・米国人・中国人）と空間的距離の操作（遠距離確認条件・統制条件）を要因とする分散分析を実施した（従属変数は集団同一視得点）。その結果、国籍の主効果 ($F(2, 81)=.52$, $n.s.$, $\eta^2=.01$)、空間的距離の操作の主効果 ($F(1, 81)=.06$, $n.s.$, $\eta^2=.00$)、交互作用効果 ($F(2, 81)=.44$, $n.s.$, $\eta^2=.01$)、いずれも見られなかった。条件間で、参加者の集団同一視に偏りは見られなかった。

以上より、分析対象者の外集団成員との接触頻度や保持意見、集団同一視の程度が確認できたため、以降の分析を進めた。

操作チェック

1. 空間的距離の操作の有効性 空間的距離の操作の有効性を確認するため、遠距離確認条件か統制条件かの別で、（第三者の空間的距離評定値を提示

された時、自分が相手をかなり遠ざけていると）“感じた・感じなかった”について度数に偏りがあるかを見るため、 χ^2 検定を行ったところ有意であった ($\chi^2(1, N=87)=43.39$, $p<.01$)。遠距離確認条件では“感じた”と回答した参加者が多く、統制条件では“感じなかった”と回答した参加者が多かった。これは、空間的距離の操作の意図通りの結果であり、操作の有効性はあったとみなすことにした。

2. エッセイの妥当性 ターゲットの原発賛成度は、中点よりも有意に高く ($t(86)=10.24$, $p<.01$)、原発に賛成している程度が高いとみなされていた。エッセイの有効性が確認された。

3. 集団への既存の好意度が社会的距離評定値に及ぼす効果の検討 本研究では、集団への既存の印象（好意度）と社会的距離を区別する。ただし、集団への既存の印象が、空間的距離操作後の社会的距離評定値と関連する可能性があるため、これを確認する目的で、各集団への既存の印象を共変量とし、ターゲットの国籍（日本人・米国人・中国人）と空間的距離の操作（遠距離確認条件・統制条件）を要因とする共分散分析を実施した（従属変数は社会的距離得点）。その結果、国籍の主効果は見出されたが ($F(2, 80)=3.63$, $p<.05$, $\eta^2=.08$)、空間的距離の操作の主効果は見出されなかった ($F(1, 80)=.22$, $n.s.$, $\eta^2=.00$)。そして、各集団への既存の印象を統制しても、有意な交互作用効果が見られ ($F(2, 80)=4.47$, $p<.05$, $\eta^2=.10$)、後述の仮説検証における、分散分析の結果と同様の傾向を示した。つまり、社会的距離評定値は空間的距離の操作によって影響を受けたといえよう⁶⁾。

空間的距離の遠近の認知が社会的距離評定値に及ぼす影響

空間的距離が遠いという認知によって、日本人・米国人・中国人に対する、その後の社会的距離評定値に差が見られるか検討するため、ターゲットの国籍（日本人・米国人・中国人）と空間的距離の操作（遠距離確認条件・統制条件）を要因とし、社会的距離得点を従属変数とする 2 要因分散分析を実施した。

⁶⁾ 本来は測定対象が集団と個人（ターゲット人物）で異なっており、混乱が生じるころではないが、主題である社会的距離という表現に、集団レベルの印象、個人レベルの親近性などが混在している可能性も考えられたため、念のため確認した。

⁵⁾ 参加者のターゲットに対する空間的距離評定値について（日本人・遠距離確認条件： $M=53.53$, $SD=12.66$ ；日本人・統制条件： $M=33.94$, $SD=15.06$ ；米国人・遠距離確認条件： $M=65.64$, $SD=19.08$ ；米国人・統制条件： $M=35.50$, $SD=16.66$ ；中国人・遠距離確認条件： $M=60.13$, $SD=18.52$ ；中国人・統制条件： $M=46.45$, $SD=24.45$)、条件間で差が見られるか確認するため、ターゲットの国籍（日本人・米国人・中国人）と空間的距離の操作（遠距離確認条件・統制条件）を要因とする分散分析を実施した（従属変数は空間的距離評定値）。その結果、国籍の主効果は見出されなかったが ($F(2, 81)=2.24$, $n.s.$, $\eta^2=.05$)、空間的距離の操作の主効果は見出された ($F(1, 81)=30.58$, $p<.01$, $\eta^2=.27$)。遠距離確認条件で、より空間的距離評定値が大きかった。しかし交互作用効果は見られなかった ($F(2, 81)=1.56$, $n.s.$, $\eta^2=.04$)。交互作用効果が見られなかったことから、条件間で大きな偏りはないものとみなし、以降の分析を進めた。

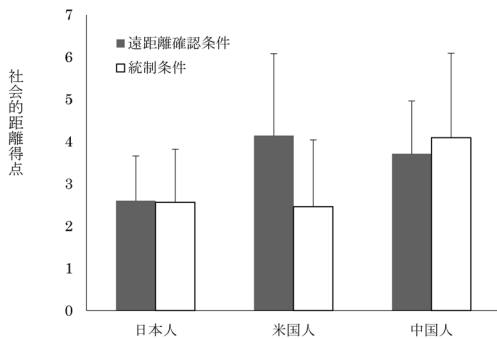


Figure 1 空間的距離実験操作後の社会的距離得点
※グラフ内のバーは標準偏差 (SD) を表す。

その結果、国籍の主効果は見出されたが ($F(2, 81) = 5.30, p < .01, \eta^2 = .12$), 空間的距離の操作の主効果は見出されなかった ($F(1, 81) = 1.84, n.s., \eta^2 = .02$)。また、国籍と空間的距離の操作の交互作用効果が有意であった ($F(2, 81) = 3.67, p < .05, \eta^2 = .08$)。単純主効果検定を行ったところ、国籍の単純主効果が、遠距離確認条件 ($F(2, 81) = 4.00, p < .05, \eta^2 = .09$), 統制条件 ($F(2, 81) = 4.42, p < .05, \eta^2 = .10$) で見出された。また、空間的距離の操作の単純主効果が、米国人に対して見出されたが ($F(1, 81) = 9.12, p < .01, \eta^2 = .10$), 日本人 ($F(1, 81) = .01, n.s., \eta^2 = .00$), 中国人 ($F(1, 81) = .39, n.s., \eta^2 = .01$) では見出されなかった。遠距離確認条件では、米国人は日本人よりも有意に社会的距離得点が高かった (Figure 1)。統制条件では、中国人は日本人よりも社会的距離が遠く、同じく中国人は米国人よりも社会的距離が遠いという結果であった。さらに、米国人の遠距離確認条件は、統制条件よりも有意に社会的距離得点が高かった。

外集団に関する既存の空間的距離感が、社会的距離評定値に及ぼす影響

上記の分析結果が、単に既存の空間的距離感が近い集団・遠い集団を対象にしたから生じたのではなく、米国・中国という集団成員性の効果により生じたことを確認した。両外集団成員に対する既存の空間的距離評定値の中央値以上を空間的距離遠群、以下を空間的距離近群とし、ターゲット人物のカテゴリー (日本人・空間的距離遠群・空間的距離近群), 空間的距離の操作 (遠距離確認条件・統制条件) を要因とし、社会的距離得点を従属変数とする 2 要因分散分析を実施した。その結果、カテゴリーの主効果が見られ ($F(2, 81) = 4.51, p < .05, \eta^2 =$

.10), 空間的距離遠群は日本人よりも社会的距離が遠かった。しかし、空間的距離の操作の主効果と ($F(1, 81) = 2.05, n.s., \eta^2 = .03$), 交互作用効果は見られなかった ($F(2, 81) = 1.55, n.s., \eta^2 = .04$)⁷⁾。

本研究の仮説検証における分散分析の結果では、先述の通り、有意な交互作用効果が確認されているが、この結果はそれとは異なるものである。つまり、各カテゴリーに対する既存の空間的距離感の遠近によって、空間的距離の実験操作後の社会的距離評定値に有意差が見られたのではなく、米国か中国かという集団成員性の違いにより、空間的距離の実験操作後の社会的距離評定値に有意差が見られたといえよう。

考 察

本研究の結果は、空間的距離の実験操作と成員性の違いによって、社会的距離評定値に有意差が見られることを示したといえる。

内集団では、条件間で有意差は見られなかった。予備調査でも確認されたように、内集団成員は、内集団に関する既存の印象 (ポジティブ感情) とその強さも強固であるため、空間的距離が遠いという刺激情報を受けても、内集団への評価は変動しにくく、社会的距離は遠くならなかったと考えられる。よって仮説 1 は支持された。

また、予備調査の結果、外集団は内集団よりも、既存の印象の強度は小さかった。そして、外集団間で既存の印象の違いが見られ、米国人よりも中国人

⁷⁾ 各集団成員への既存の空間的距離感の値は、日本人が $M = 13.22$ ($SD = 13.58$), 米国人が $M = 43.44$ ($SD = 19.15$), 中国人が $M = 61.60$ ($SD = 19.05$) であった。また、両外集団成員に対する、既存の空間的距離感の中央値は 51 mm だった。米国人に対しては、全参加者の 31.03% が、中国人に対しては、全参加者の 66.67% が、日本人に対しては全参加者の 5% が、この中央値よりも高く評定していた。

なお、日本人を除き、ターゲット人物のカテゴリー (空間的距離遠群・空間的距離近群), 空間的距離の操作 (遠距離確認条件・統制条件) を要因とし、社会的距離得点を従属変数とする 2 要因分散分析も実施した。その結果、カテゴリーの主効果 ($F(1, 52) = .87, n.s., \eta^2 = .02$), 空間的距離の操作の主効果 ($F(1, 52) = 2.24, n.s., \eta^2 = .04$), 交互作用効果 ($F(1, 52) = 1.74, n.s., \eta^2 = .03$), いずれも確認されなかった。仮説検証における分散分析の結果とは異なっていた。

の方がネガティブな印象であった。ネガティブな対人態度ほど変化しにくい (e.g., 唐沢・川口, 2003) とされるため、既存の印象の強度が同程度の外集団間では、既存の印象がネガティブな外集団で、空間的距離が遠いという刺激情報を受けても、社会的距離は遠くならないと考えられる。本研究の結果は、この予測を支持し、中国人では条件間で有意差は見られなかった。仮説2は支持された。なお、中国人について、既存の印象がネガティブで天井効果が生じたため、空間的距離の実験操作の効果が小さかったとも考えられるが、Figure 1にあるように、中国人の各条件の平均値は中点以下であった。そのため、天井効果が生じたのではないといえよう。

一方、米国人は、条件間で有意差が見られ、遠距離確認条件で社会的距離得点が高かった。米国人は、刺激情報により評価が変化しやすいといえる。こうした米国人における、空間的距離と社会的距離の連動は、参加者の中で態度の一貫性 (e.g., Bem, 1972) が生じたとも考えられる。空間的距離が遠いという態度の認知が起り、その態度の一貫性を保とうとして、続く社会的距離も遠く回答したと考えられる。つまり、空間的距離の効果が、社会的距離評定値に波及したのである。ただし、空間的距離の効果のインパクトを弱めるような強固なもの (既存の印象の強度やネガティブな印象) があれば、こうした波及効果は起りにくいと考えられる。日本人と中国人ではこうした理由で、空間的距離と社会的距離の連動が生じなかったと推察される。

そして、統制条件で、中国人が日本人・米国人よりも社会的距離得点が高かったということは、空間的距離が遠いという認知が弱い場合、エッセイを読んだことによるターゲットへの社会的距離がそのまま表出されたといえ、既存の印象が最もネガティブであった中国人で、エッセイを読んだ後も親密度が低かったと考えられる。遠距離確認条件で、米国人が日本人よりも社会的距離得点が高かったということも、米国人では空間的距離の実験操作の効果が見出されたが、日本人では効果が見出されず、既存の社会的距離を反映したとも考えられよう。

これまで見てきたように、本研究では、独立変数に集団成員性を含めた。特に、外集団間での比較を行い、既存の印象がポジティブな外集団とネガティブな外集団では、前者で空間的距離の長短の認知が

社会的距離評定値に影響しやすいことを、初めて明らかにした点で意義がある。そして、本研究で見られた現象は、単に既存の空間的距離感が近い集団・遠い集団を対象にしたから生じたわけではなく、米国・中国という集団成員性の効果により生じたことも確認された。この結果は、心理的な意味として、集団に関する既存の好意度と、その強度が、物理的・心理的刺激のインパクトに対する緩衝効果を持つことを示唆している。本研究で立てた仮説が、この結果よりも側面的に支持されたといえよう。さらに、社会的な意味として、中国という外集団に対するネガティブな印象を払拭するためには、より多くの心理的・時間的コストを要し、他の外集団 (他国) と同様のアプローチでは不十分であることが示唆されたといえる。反対に、米国に限らず、既存の印象がポジティブで、その強度が弱い国が対象となれば、少しのプロパガンダにより、世論が大きく変動しかねない可能性も示唆している。本研究は外集団を一括りにしてアプローチすることの脆弱さや問題点を浮き彫りにしたともいえよう。

また、本研究の実験操作で用いた刺激は、厳密な意味での空間的距離 (三次元の物理空間における他者との距離) ではなく、距離の線分へ投影された値であった。本研究は、こうした単純な物理的・心理的刺激であっても、外集団成員に対する心理的反応に影響が見られることを示した点で興味深いが、実験刺激の一部に投影法を用いたことの限界も留意しなければならない。空間的距離評定値として、参加者がどれくらい正確に対象との空間的距離を表明できていたかについて、検討の余地もある。そのため、今後、統制された三次元上の空間的距離を刺激として用い、内・外集団成員に対する社会的距離を検討し、本研究の結果と比較することも課題である。

引用文献

- 天貝由美子 1996 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係カウンセリング研究, 29, 130-134.
- Bem, D. J. 1972 Self-perception theory. *Advances in Experimental Social Psychology*, 4, 1-62.
- 防衛省・自衛隊 2014 平成 26 年版防衛白書
- Brockett, A., Village, A., & Francis, L. J. 2009 Internal consistency reliability and construct validity of the attitude toward Muslim proximity index (AMPI): A measure of

- social distance. *British Journal of Religious Education*, **31**, 241–249.
- Brockett, A., Village, A., & Francis, L. J. 2010 Assessing out-group prejudice among secondary school pupils in northern England: Introducing the Outgroup Prejudice Index (OPI). *Research in Education*, **83**, 67–77.
- Frings, D., Abrams, D., Randsley de Moura, G., & Marques, J. 2010 The effects of cost, normative support, and issue importance on motivation to persuade in-group deviants. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice*, **14**, 80–91.
- Fujita, K., Henderson, M. D., Eng, J., Trope, Y., & Liberman, N. 2006 Spatial distance and mental construal of social events. *Psychological Science*, **17**, 278–282.
- Gaebel, W., Baumann, A., Witte, A. M., & Zaeske, H. 2002 Public attitudes towards people with mental illness in six German cities. *European Archives of Psychiatry and Clinical Neuroscience*, **252**, 278–287.
- 唐沢かおり・川口 潤 2003 否定的対人態度の訂正について—情報否定効果の検討— 人間環境学研究, **1**, 51–56.
- Karasawa, M. 1991 Toward an assessment of social identity: The structure of group identification and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 293–307.
- 唐沢 穰 1991 集団同一視尺度吉田 富二雄(編) 心理測定尺度集 II 東京: サイエンス社 pp. 221–225.
- 久保 恵 2000 対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像—内的ワーキングモデルの観点からの検討— 教育心理学研究, **48**, 182–191.
- Liberman, N., Trope, Y., & Stephan, E. 2007 Psychological distance. In Kruglanski, A. W., & Higgins, E. T. (Eds.), *Social Psychology: Handbook of Basic Principles* 2nd ed. New York: Guilford Press, pp. 353–383.
- Liviatan, I., Trope, Y., & Liberman, N. 2008 Interpersonal similarity as a social distance dimension: Implications for perception of others' actions. *Journal of Experimental Social Psychology*, **44**, 1256–1269.
- 美山理香 2003 大学生の友人との心理的距離に関する基礎的研究 九州大学心理学研究, **4**, 27–35.
- 向田久美子・坂元 章・村田光二・高木栄作 2001 アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化 社会心理学研究, **16**, 159–169.
- 内閣府大臣官房政府広報室 2014 外交に関する世論調査
- 総務省統計局 2014 港別 入国外国人の国籍・地域
- Stephan, E., Liberman, N., & Trope, Y. 2011 The effects of time perspective and level of construal on social distance. *Journal of Experimental Social Psychology*, **47**, 397–402.
- Tajfel, H. 1982 Social psychology of intergroup relations. *Annual Review of Psychology*, **33**, 1–39.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. 1971 Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 149–177.
- Williams, L. E., & Bargh, J. A. 2008 Keeping one's distance: The influence of spatial distance cues on affect and evaluation. *Psychological Science*, **19**, 302–308.

(受稿: 2014.11.26; 受理: 2015.8.4)